スポーツ文化：身体運動と文化に関する基礎的研究

Ｊクラブ下部組織の選手，保護者へのキャリア形成サポート活動について

飯田 義明（経済学部教授）

これまでスポーツ研究所の助成及びJSPS科研費（2005-2007,2015-2017,2017-2020）などを受け，プロサッカー選手を目指す選手のキャリア形成に関して研究をすすめてきた（飯田，2012,2016,2018）。本年度もコロナ禍の影響で様々なスポーツ活動や調査などが中止，または調査対象者への配慮から調査が延期されている。その一方で，各Ｊクラブはこの現状をトリガーにして新たな試みを探っている。その一環として，キャリア形成についてユース年代（15-18才）から意識させる試みを始めた。この試みの特徴は選手と共に保護者も一緒に参加するところである。今回，某Ｊクラブからこれまでの研究成果と現場を往来してきた知見から話を聞きたいとの打診を受け，協力をさせていただいく機会を得たため，本稿ではその報告をする。

1. はじめに

近年，プロサッカー選手（以下，プロ選手）を目指す選手たちは，高い技術を獲得するために幼少期から地域の少年団やクラブなどに所属し，多くの時間を割くようになってきている。つまり，活動開始が低年齢化しており学校教育の枠外である学外活動として専門的に行っている。Ｊクラブにおいては競技成績によって12,15,18才の３回の時点で昇格可能かどうかの分岐点がある。選手は昇格に向かって努力をしているが，プロ選手に辿り着けるのは約1割以下である（クラブ資料より）。そのため，プロ選手を目指すことは競技寄りになりがちであるが，文武両道で成長していくことが理想として求められる（そこに選手・保護者の困難さがある）。この成長過程でどのようにキャリアを考えたら良いのかを軸として，選手には事例から理解してもらい，保護者には選手にとってどのようなキャリア・パスが考えられるのかを意識して講義を行った。

2. 講義内容

コロナ禍であり，講義は６月下旬にZoomを利用して行われた。保護者の方には画面に入らないようにし，内容を視聴してもらった。この講義についてはクラブ側が全て録画し，当日参加できない保護者には後から確認できるようにした。選手の議論の際には，ブレイクアウトルームを利用した。講義は以下のように進めた。

1，キャリアとは？

2，サッカーを軸とした５つのキャリア・パスの可能性を示し，それについて事例を提示して講義を進めた。1）トップチームに昇格する。2）高校卒業後に海外プロクラブへの挑戦。3）大学への進学（スポーツ推薦なのか，指定校推薦なのか，受験なのか）はどのように，4）大学から海外へ，5）高度競技から離れ，趣味としてサッカーとかかわっていく。以上の５つのキャリア・パスの事例を提示し説明を行った。それを踏まえて，今の自身を振り振り返り，次への準備と覚悟が出来ているかの確認をしてもらった。そしてグループ分けをして，各々がどのように将来像を描きどのように準備をしているか，自身の現在地を議論してもらった。

3，最後にまとめとして，体力・技術面だけでは無く，知的・認知的な側面を18才までに高めることの重要性を説明した。

3. 選手，保護者からの反応

このサポート講義終了後に育成コーチ，選手，保護者から評価フィードバックを頂いた。結果は概ね良い評価であった。選手からは，「自分の進路を、決めていく中で、どのようにしていけばいいのかなんとなくだが、理解できたと思う」，「今後のキャリアについて考えることができたし、自分自身が今後どうしていきたいか、どうなっていきたいのかを考え直すことが出来た」等の声が多くあり，漠然としたイメージから少し具体的に考えることができるようになったと思われる。保護者からは，「現在U-17の立ち位置ではありますが、目標に対して時間がないことを改めて認識いたしました」，「キャリアと進路のイメージが分かりやすく伝わって、具体的な内容で良かったです」などの意見を頂いた。問題点としては，「全体的には満足しておりますが、進路という意味でユース３年生としては少し遅いと感じました」という意見が挙がるなど３年生にとっては時期が少し遅かったようであった。今後に活かしていくべき反省点であろう。保護者からは更に詳細な話を個別に聞きたいとの希望もあったようだが今年度は対応していない（コロナ等の関係でクラブ判断として）。今後はどのように対応するかクラブと話し合い，少しでもクラブに協力できればと考えている。

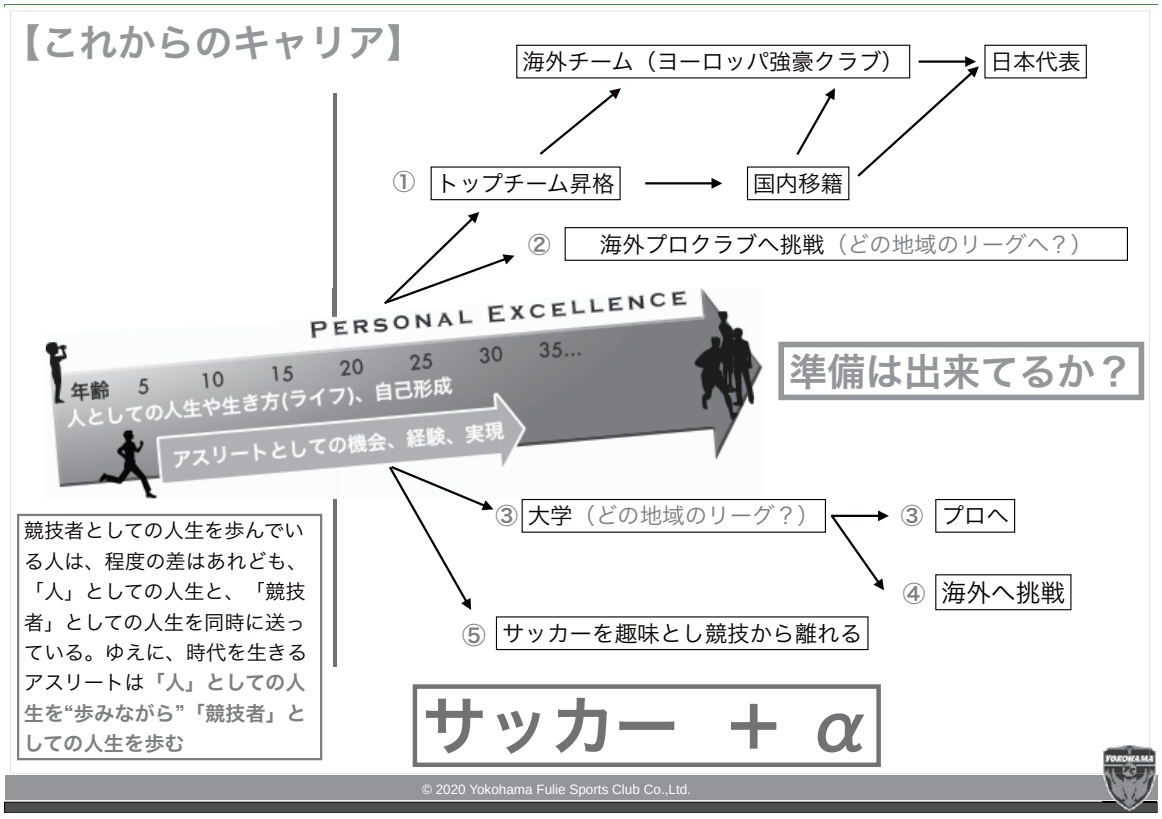
4. 今後に向けて

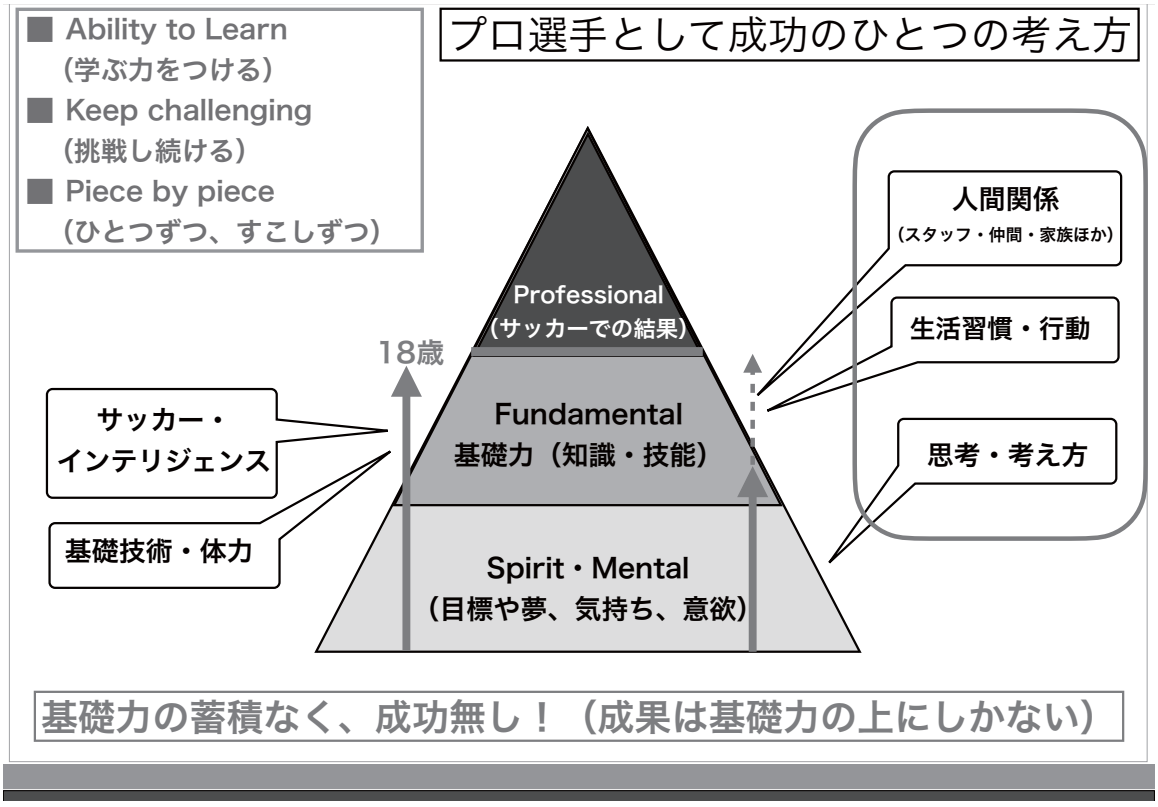
スポーツ選手のキャリア形成については，まだまだ多くの問題を抱えていると思われる。このような問題は，Holtらが「その実践とスタイルの在り方の個人差には様々な状況が影響する」と指摘するように（Holt, et al., 2009），日本の教育制度とクラブとの関係，各保護者の学歴・スポーツ歴や育成環境・経済的状況の背景などによって異なってくる可能性がある。その点を含め，今後さらに多くの事例を収集していく必要性があるだろう。

追記：コロナ禍における身体文化研究の動向と現状

これまで身体文化の研究として，長野県諏訪地方で６年に1回（7年目）開催される式年造営御柱大祭についてもフィールドワーク（上社）を行いながら研究を進めてきた。2022年４月２－４日は，前回から７年目の御柱祭年である。本来であれば，2021年はその準備で諏訪地方は活気に満ちているはずであり，フィールド調査に明け暮れるはずであった。しかし，昨年の所報でも記したがコロナ禍の影響で活動が制限されており，現場に足を運べず電話の聞き取り調査しか出来ていない。22年２月中旬には各地域の抽選大総代が決まる。可能であるなら，前回同様にそこにはせ参じたいものである。今は只々早くコロナ禍が収まるのを願うばかりである。

付記：本研究の一部は令和３年度スポーツ研究助成（調査研究費:スポーツ文化部門）を受けたものである。


【これからのキャリア】
海外チーム（ヨーロッパ強豪クラブ）
日本代表
① トップチーム昇格
国内移籍
② 海外プロクラブへ挑戦（どの地域のリーグへ？）
PERSONAL EXCELLENCE
年齢 5 10 15 20 25 30 35…
人としての人生や生き方(ライフ)、自己形成
アスリートとしての機会、経験、実現
準備は出来てるか？
③ 大学（どの地域のリーグ？）
③ プロへ
④ 海外へ挑戦
⑤ サッカーを趣味とし競技から離れる
競技者としての人生を歩んでいる人は、程度の差はあれども、「人」としての人生と、「競技者」としての人生を同時に送っている。ゆえに、時代を生きるアスリートは「人」としての人生を“歩みながら”「競技者」としての人生を歩む
サッカー ＋ α
© 2020 Yokohama Fulie Sports Club Co.,Ltd.


■ Ability to Learn
(学ぶ力をつける)
■ Keep challenging
(挑戦し続ける)
■ Piece by piece
(ひとつずつ、すこしずつ)
プロ選手として成功のひとつの考え方
Professional
(サッカーでの結果)
18歳
Fundamental
基礎力（知識・技能）
Spirit・Mental
(目標や夢、気持ち、意欲)
サッカー・
インテリジェンス
基礎技術・体力
人間関係
(スタッフ・仲間・家族ほか)
生活習慣・行動
思考・考え方
基礎力の蓄積なく、成功無し！（成果は基礎力の上にしかない）